

「吉備津の釜」論―古代的神性をめぐって―

村 瀬 木 綿 子

「雨月物語」の「吉備津の釜」は全体の構成、テーマという点に
 関しては従来言われてきたように、「善悪報はなし」巻五第八「女
 の一念来て夫の身を引そひて取てかへる事」と重なるものである。
 そして更に「今昔物語集」巻二四第二〇、巻二七第二〇や謡曲「鉄
 輪」などといったものもその典拠作品の一つとして考えられてき
 た。また冒頭部分は和刻本がはやくから出ていた「五雑俎」による
 ものであり、御釜祓の部分については「本朝神社考」が用いられ、

後半部では「剪燈新話」巻二「牡丹燈記」及びその翻案ものや、「源
 氏物語」、「日本霊異記」、「新御伽婢子」巻一の二「化女髻」、「源
 利物語」巻四「耳されうん市が事」などその他多くの作品が典拠作
 品、参考作品として考えられてきた。しかし物語の大枠は、夫に裏
 切られた「嫉婦」が夫を取り殺すというもので、全体の構成やテー
 マの類似を「善悪報はなし」にもとめるまでもないほど、怪異譚的
 復讐譚の典型的な形をとっている。

ただこの物語が、他の「善悪報はなし」などに見られる怪異譚的
 復讐譚と一線を画しているのは、物語が備中の吉備津神社という古

い伝承を保持する所に設定されていることによる。単にこの話の複
 雑な構成や、登場人物に付与された資質や倫理観、または典拠作品
 の改変といったことによるのではない。むしろ物語は、吉備津神社
 という地主神の祀られている伝承の地を舞台にすることによって、
 その祭神とも重なる主人公磯良が靈力を発揮させていく話となつて
 いる。しかも後にも述べるが、この作品は古代的神性が息づく地に
 暮らす者たちが、その古代の伝承の力ともいべきものに突き動か
 される物語と読むことができるのである。

二

〈吉備津神社〉

主人公磯良は吉備津神社の神主の娘で、神社の祭神の末裔とさ
 れ、吉備津神社の神の神性が付与された人物として設定されてい
 る。では、吉備津の神とはどのようなものだったのかを、この神社
 の祭神である吉備津彦命とその一族の伝承から確認しておきたい。

キーワード：「吉備津の釜」、「雨月物語」、上田秋成、磯良

『日本書紀』崇神天皇の一〇年九月の条に、吉備津彦命は四道將軍の一人となり「西道」に派遣され平定していくという記述が見える。これは「古事記」孝靈天皇の条に、「大吉備津日子命」とその弟「若建吉備津日子命」が播磨の国を道の入口として吉備国を平定したとする話に重なる。また『日本書紀』崇神天皇の同条に、吉備津彦命の反逆者（武埴安彦とその妻吾田姫）征伐が見える。同紀六〇年秋七月の条には、出雲振根追討の記載がある。このように吉備津彦命は征服神としての面影を持つのである。

更に、この地方の伝承として有名な吉備津彦命の悪神温羅退治があげられる。この話は、『備之中州名所』『歌枕備中民談』『和氣緝』『備中巡礼畧記』『備中村鑑』『吉備津神社伝』などに見られ、藤井駿氏の『吉備津神社』において詳しく述べられている。これによると吉備津彦命が退治した温羅の首は吉備津宮の釜殿の竈の下に埋められたが、なお十三年間うなりは止まず近郷に鳴り響いたとされている。そしてある夜、吉備津彦命の夢に温羅が現われ、

「若し世の中に事あれば竈の前に参り給はば幸あれば裕かに鳴り、禍あれば荒らかに鳴ろう。(略) われは一使者となつて四民に賞罰を加えん」

(前出 藤井駿氏『吉備津神社』)

と述べる。このように悪神温羅を退治する征服神の側面に、温羅という「四民に賞罰」を与えるものが加わって、吉備津彦の神は荒ぶる神、崇りをなす神として形成されていく。この崇りをなす神としては、『十訓抄』第一〇の楽人元正が神罰を被る話などに見える。

こうした征服神、荒ぶる神、崇り神として恐れられていた吉備津の神が、磯良にそっくり重ねられることによって、磯良の、夫正太郎への復讐が可能になったと考えられる。しかも征服神というだけではなく温羅的な面、崇り神としての面を前面に出すことによって、鬼神性が磯良に付与されていき、それによって磯良は正太郎に「窮鬼」と認識され、刀田の陰陽師には「鬼」と呼ばれることになる。しかも磯良の力は、結局は陰陽師にも打ち勝つほどの強大なものとなつてしまい、それまでの信仰と畏怖の対象であった吉備津神社に、さらなる新たな側面を与えていく形となるのである。

〈吉備一族〉

磯良の形成と吉備津神社との関係の大枠は、以上述べてきたとおりであるが、さらに物語の記述に即して考察していきたい。この物語は、その冒頭の記述によれば「嫉婦」が死後「蟒」や「霹靂」となつて夫を襲つていく物語である。作品の冒頭部は「五雑俎」の叙述の集約と言われてきた。この冒頭の嫉婦論については、作品全体に照応する特殊な意味を持つものであり(鶴月洋氏「兩月物語評釈」)、男の側に責任を求める(高田衛氏「兩月物語評解」)という、物語主題にストリートにつながるもの(井上泰至氏「吉備津の釜」)「後妻打ち」からの乖離「上智大学国文学論集」二〇)であるという捉え方がされてきた。今、これを物語の主題といたところに関わらせるのではなく、まさにここに提示された言葉自体に注目してみると、「さるためしは希なり」としながらも、
死て蟒となり、或は霹靂を震ふて怨を報ふ類は

というような妬婦の恐ろしさについて述べている。その希な「ためし」がこの物語なのであった。すなわち単なる亡霊譚ではなく、古代的神性に裏打ちされた「蛇神」「雷神」の物語として予告されているのである。磯良が「蟒」「霹靂」となるという物語の枠は、実はこの吉備津神社、吉備一族、磯良の基底に横たわるものにより生じたと考えられる。

吉備津神社とその祭神となる吉備一族は蛇神と深いかわりを有していたようである。『日本書紀』神代卷上第八段（一書第三）には、スサノヲの八岐大蛇退治の剣が吉備の神部のもとにあるとされている（『本朝神社考』、『本朝怪談故事』にも引用される）。更に、磯良の先祖「鴨別」から出た笠臣の「大虬」退治は『日本書紀』仁徳天皇六七年の条に記されている。このように吉備津神社、吉備一族と蛇との関係が仮定できそうな資料がいくつも見ることができ。しかも、この吉備津神社の社家は賀陽氏、藤井氏、堀家氏、河本氏などが主なもので、特に賀陽氏はそのもつとも大きなもので、『扶桑略記』『今昔物語集』『元亨釈書』などにこの神主としての名がみえる。そして賀陽氏の本貫地が、この物語の舞台ともなる「賀夜郡」となる。「カヤ」は「加夜」「賀夜」「蚊屋」「香屋」とも記され、後に「賀陽」となり後世「かよう」と呼ばれた。「カヤ」という音に注目してみると、『古事記』にイザナミとイザナギの子として出てくる野の神「カヤノヒメ」がその「カヤ」に通じるものと思われる。この野の神は「鹿屋比賣神」またの名を「野椎神」とする。すなわち、「カヤ」＝「ノヅチ」となっている。野椎とは野に住む蛇の

ことを言うので、この野の神は蛇性を帯びた神と考えられる。

「カヤ」と蛇神との関わりのみでなく、磯良の出自を物語において見てみると、次のように記されている。

吉備津の神主香央造酒が女子は、（略）従来かの家は吉備の鴨別が裔にて

この「香央造酒」については、「鴨別」から出た笠臣が笠田とも称せられたからとする説（鶴月洋氏 前出書）が妥当と思われる。しかもこの「造酒」というところから、スサノヲが八岐大蛇退治の時に酒を造らせたという民間伝承を思い合せてみると、奇妙にもスサノヲ—蛇—「香央造酒」がここでもつながってしまうのである。また、「鴨別」「笠臣」「笠田」という名前自体に注目してみると、「鴨別」の「鴨」は、賀茂神社の神、「賀茂」に通じるのではないかと思われる。賀茂の神は「山城国風土記」「賀茂之本地」「賀茂神縁伝」に示されるように雷神であり同時に蛇神である。そして、古代において蛇神（雷神）は水の神であり、農耕の神とされていたわけで、この農耕の神は、スサノヲが蓑笠をつけていたことから、笠を着たものとされ、同時に鬼の資格を持つものであったという。吉野裕子氏は「蛇—日本の蛇信仰」において、植物の蒲葵がその形態から、蛇に見立てられ、後に蒲葵の蓑笠が蛇を表すようになり、さらにただの笠を着たものが蛇の象徴となっていく道筋を述べている。これらの説を踏まえると、「鴨別」である笠臣もまた蛇との関係で説明できる。『姓氏録』に天皇が、笠佐米山で笠を飛ばしたため鴨別が神の真意を天皇に告げ、その正しさのほうびとして「カサ」の名を

もらったという話がみえる。これは単に笠臣の名の由来を地名と合うように説明したものに見えるが、やはり「笠」をまとう者―蛇神と関わる一族の話としてあるのではないか。「鴨別」の「鴨」が賀茂と通底するというのも、やはり蛇神との関わりがこの一族にあったためと考えられるのではないだろうか。

また、この一族が領有していた吉備地方は、その枕詞「まがね吹く」でも知られるように古代の鉄生産地であった。この、鉄の生産地であったということが、スサノヲの剣の伝承を一方で吉備津神社に結びつけたともいえよう。記紀神話に登場する雷神タケミカヅチの神は同時に刀剣の神であったと考えられる。雷神（＝蛇神）と刀剣の神とのつながりから考えても、この鉄生産地（刀剣の生産地）に蛇神の伝承があったことは不思議ではないように思われる。以上より、吉備津神社を司る者たちや祭神が、蛇神との深い関わりを持つものであると考えることができる。

〈磯良〉

そしてこの蛇神と関る「鴨別」の裔が、女主人公「磯良」ということになる。この名の由来となる磯良神については、「太平記」三九巻、「八幡愚童訓」、「本朝神社考」、「本朝怪談故事」、謡曲「香椎」などに見られ、醜い海神とされている。この「磯良」と言う命名に関して、「秋成「シンボジウム日本文学」」で多くの意見が述べられてきた。松田修氏は醜貌の怪奇さを示す言葉であるとし、森山重雄氏は沈黙の女を意味するとし、さらに中村博保氏は古代的グロテスクさの復活としてこの言葉が機能しているとする。また高田衛氏も

(前出書) 優美な女性がその仮象性の下に醜い姿―磯良性をもつものと措定されているとする。こうした醜い神磯良の本質をたどったのが、高橋庄次氏の「雨月物語の神仏習合空間―連作複合詩篇の構想」¹⁾である。高橋氏は「八幡愚童訓」や鬼能「春日龍神」から、春日明神であった磯良神は、龍蛇神であったとした。また永留久恵氏「海神と天神―対馬の風土と神々」の説を引用し、

磯良という海神の(中略) 正体は金鱗の蛇で、大きくもなれば小さくもなり、鱗文の盤石ともなるわけで、神話では海祇たまひと称し、少童とも書くが、祭祀上は磯良と称し

と神体が変幻自在の蛇神であるとする。そして氏がさらに述べるように、この磯良神は八幡神と深くかかわっているという点については、すでに折口信夫氏の研究がある²⁾。

磯良神が吉備津神社の祭神、あるいは神主である者に結び付けられていったのは、この蛇神信仰によるものと考えられる。単に醜貌の神であり、アイロニーとしてこの命名がなされたというだけでは、磯良神が吉備津神社と結合する意味が分からない。そして八幡信仰と吉備津神社との関係もあながち無いとは言えないのである。柳田國男氏は「一つ目小僧その他」(『柳田國男全集』巻五)³⁾において、八幡神の大人征服の昔話の一つとして、備中の温羅退治をあげている。確かに筑豊の塵輪や備前の牛窓の海神などは、八幡神と関係し、温羅もこの系列におくと、この地方に古く八幡神信仰があったことが分かる⁴⁾。

以上のように見てくると、この吉備津神社や吉備地方には、蛇神

信仰、八幡神信仰があり、「磯良」という命名もそれらの信仰に基づくものであると考えることができる。吉備津神社の祭神として立ち現われてくる「磯良」が、物語において「蟒」「霹靂」となってしまうとされるのも、このような地名、神社名、神名にまつわる古代的神性によってもたらされたものだった。

〈賀夜郡庭妹の郷〉

吉備の国賀夜郡庭妹の郷に、井沢庄太夫といふものあり。

このように物語は冒頭で、「賀夜郡庭妹の郷」に舞台が設定される。そして、主人公である、井沢庄太夫の一子正太郎は

農業を厭ふあまりに、酒に乱れ色に酩酊りて、父が掟を守らず。

という典型的な放蕩息子とされている。この正太郎の暮らした「庭妹の郷」が吉備津神社の所在地でもある。「庭妹」とは「大日本地名辞書」において「新瀬」の意で、船の出入りのあるところとされている。「庭妹」が「庭瀬」とも記されることから、この説は妥当なものと思われる。ただ「賀夜」という地名が蛇神と関わるように、この地名「庭妹」も蛇神と関係の浅からぬ、水辺の地であったということとは注目してよいだろう。「ニヒセ」が「ニワセ」になった点に留意すると、「庭」という言葉に突き当たる。「庭」が神をまつる齋場であったとするならば、この水辺の地が霊場の地とされていく過程が考えられる。この「庭妹の郷」にある有名な「吉備の中山」は、一説では古陵墓、葬所であったとされ、またこの山自体が霊山とされていたという。さらに同郷の「中山の有木の別所」も浄土信仰の聖地であり、「平家物語」巻二や「源平盛衰記」第八に見

える、新大納言成親が悲惨な最期を遂げるという話も、「日本行脚文集」や近世吉備の地誌である「備中名勝考」「備陽国誌」「寸鏡之塵」「備之中州名所」「備中巡礼畧記」などにこの地方の伝承として記されている。この水辺の地であり、同時に吉備津神社を有する郷に霊場を示す「庭」があてられたのは、この地方独特の古代から脈々と流れ続けている、信仰、靈性と言ったものによるのではないか。そのような場所であるからこそ、成親の話は潤色を施され、怨霊にまでなってしまうのだろうか（「源平盛衰記」）。

高田衛氏は、この「庭妹の郷」にあった吉備津神社の門前町宮内町が、近世では山陽道屈指の芝居町、遊女町であり、全国的に有名なものであったことを指摘し、さらに正太郎の放蕩ぶりは「奇妙にも土地の実状に即していたのだった」としている（「旅の時空と物語の時空—近世小説の場合—」「日本の文学」第三集）。この「庭妹の郷」は、このような芝居町、遊女町という遊びの空間を有すると同時に、古代から畏怖された信仰の中心としての空間でもあった。従って、ここには聖と賤といった表裏一体のものが存在し、その賤の空間に加担していったのが正太郎であり、もう一方の聖の空間に関与していたのが磯良であった。聖と賤という両極に位置するものが、表裏一体であるのと同様に、この物語の主人公たちのあり様もそれに重ねられるようにそれぞれの性質や存在が容易に正反対のものに転換されていく。神聖な、人間を救済する神の面を持つがゆえに、磯良は舅姑、夫正太郎やその愛人袖に心を配る。そしてそのやさしさは、正反対の畏怖される崇り神の面へとすぐに変換される。

また、妻を裏切り、死に至らしむ加害者としての正太郎は逆転して妻に取り殺される被害者へと変わる。こうした二人のあり方の可逆性は、「賀夜郡庭妹の郷」という土地が持つ両義性とあたかも重なるかのように描かれるのである。

〈鞆の津〉

正太郎が賤の空間を生きるものであると前述したが、このような特性を有するために、正太郎は袖という鞆の津の遊女となじみになり家庭を崩壊させる。この「鞆の津」は正太郎の住む「庭妹の郷」から西南六〇余キロのところの位置するため、従来、設定としての均衡を欠くものとされてきた(高田衛氏前出論文などにも指摘がある)。もちろん構成上の不備として片づけるわけにはいかない。「鞆の津」という場所が、正太郎の愛人袖の登場と死には不可欠であった。

この土地は地形的に船の停泊に適していたため、古くから港町として知られていた。従って、ここは海神(水の神)信仰と、「水の女」である遊女とで形成された場所であった。こうした土地の実状から、あらゆる歌や伝承が生み出されていったと考えてよい。例えば「本朝諸社一覽」「和漢三才図会」「類聚名物考」の地理部などの鞆の項に引かれている、「万葉集」巻三の四四六、四四八番歌は、亡き妻をしのぶ挽歌であり、「鞆の津」の代表的歌謡とされてきた。

吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき
鞆の浦の磯のむろの木見むごとくに相見し妹は忘れえぬやも

〔日本古典文学大系 万葉集一〕岩波書店 昭三二・五

これらの歌も、鞆の津の遊女との悲恋といった、このような土地にありがちな伝承を基底に持つように思われる。こうした「鞆の津」という言葉が内包するイメージにより、「亡き妻」としての袖と磯良の物語を予想させるものとなる。

そもそもこの地名は、「大日本地名辞書」によると港の形が巴のかたちであるからとされ、「新地名語源辞典」では「トマリ」が「トモ」と通じているとされている。こうした土地に、神功皇后の三韓征伐の伝承が入り込んだ時、「鞆」という字があてられたのではないか。神功皇后の皇子応神天皇は記紀によれば、その出生の時に腕に鞆の如き肉ができていたとある。これは母の胎内にいた時から三韓征伐に従ったということを示しているのだろう。しかも、この鞆といった武器の名前が、この土地を名指す言葉として示される。「本朝諸社一覽」によると、この地で神功皇后が兵食をつみ、船の鞆を神璽として舟玉神を祀ったため「鞆」という名がつけられたとある。

このような神功皇后伝承とも言うべきものは、この地の信仰とも密接につながりを見せる。「鞆の津」の神である「沼名前神社」を考えるとわかるのであるが、この末社に渡社明神があり、海神が祀られていたらしい。さらにこの沼名前神社は、備前の国の「風土記」逸文や「本朝諸社一覽」「本朝怪談故事」などで蘇民将来の話として語られる。この蘇民将来(武塔天神)の伝承は山城の祇園牛頭天王と同じものである。そしてこの祇園牛頭天王が、スサノヲであるとされ、さらにイナダ姫や毒蛇神を祭神とするところ(「きをんの御本地」)。これらは、「本朝怪談故事」巻二の第七や「本朝神社考」

【雍州府志】などにも見える。すなわち、蛇神に関わるものがこの祇園の祭神となり、また鞆の津の沼名前神社の祭神と重なる。折口信夫氏は「上世日本の文学」（『折口信夫全集』一二巻）において、九州から京へと布教せられていった新来の神、八幡の大神は、仏教の徒で陰陽道に這入った者の将来した神であり、その良い例として、牛頭天王—武塔天神の話があると述べている。ここからわかることは、この祇園社、沼名前神社の神が八幡神であったということだ。それはちょうど磯良神が八幡系統の神であったのと同様にである。神功皇后及びに応神天皇が八幡神と密接な関係を有するもの、このことと深く結びつく。「鞆の津」とはもともと水の神を祀っていた地であるが、そこに八幡神信仰、神功皇后伝承が入り込んだ場所なのだろう。

とすれば、この「鞆の津」の遊女である袖はまさに「水の女」であり、同時に八幡神を齋く巫女としての面影を宿す。森山重雄氏は「水の女—磯良」（『日本文学』）において、磯良という、より古代的、原生的な「水の女」が、世俗的、現世的な「水の女」袖に対して、「ウハナリ」行為を行うものとしている。しかし、さらに言えば磯良も袖もともに八幡神に関わるが、厳密に考えると、磯良はあくまでも龍蛇神であり、袖はそれに齋く者となる。従って、袖は単に正太郎の愛人というだけでなく、磯良の支配下に位置する者と考えることができる。この磯良という神に対する反逆は、当然死を意味する。以上のように見ると、「鞆」という地名が磯良と関わりを持つ時、物語における袖の登場とその死が生み出されていく。

〈印南野〉

袖の出身地が「印南野」とされ、正太郎が袖と出奔し、京を目指す途次に立ち寄ったのが「播磨の国印南郡荒井の里」であるが、二人がここに隠れこもり、それを磯良が追跡する物語になっている。こうした隠れる、追うの構図もこの「印南野」「印南」という地名が内に抱え込むイメージによるものである。

「イナミノ」という地は、「ノ」すなわち沃野としての地名であろう。しかもこの野原である「イナミ」野が、『拾遺集』に見られるように、

女郎花我に宿かせいなみの、否といふ共こゝを過ぎめや

（『国歌大観』角川書店 昭四九 一一）

「否」を引き出す言葉となったとき、この地はすべての物を拒否する地として立ち現われてくる。正太郎と袖がすべてを捨てて逃げ込んだ地とは、まさにすべてを「否」む場所となる。

さらに、この広大な野は、「イナミ」という、『風土記』に見られる印南の別嬢と景行天皇の伝承と結び付けられた土地でもあった。この『播磨風土記』において、景行天皇は印南の別嬢を妻問いしようとしたところ、別嬢が「南毗都麻嶋」に逃げ渡ってしまったため、その後を追い、結局「印南の六繼村」で結婚を成立させるといふ話が見える。印南の別嬢とは「南毗都麻嶋」に身を隠すものであった。このような伝承から「印南」には隠れこもった者とそれを追う者といったイメージが付与されていく。物語の、正太郎と袖の逃亡及び隠棲と、磯良の追跡は「印南」の持つイメージと重ねあわ

される。

そして二人を追跡した磯良の怨霊が、正太郎を欺くために、隠れこもる未亡人を演じてしまうのも、こうした地名の背負い込んでいるものに深くかかわっていることが分かる。すなわち、播磨の国「印南郡荒井の里」に着いてほどなく、物の怪に取りつかれたようになつて死んでしまった袖の墓の前で、正太郎が出会った女に聞かせられた貴婦人の様子は（実は磯良のことであつた）

恐みつる君は、此国にては由縁ある御方なりしが、人の讒にありて領所をも失ひ、今は此野の隈に侘しく住せ給ふ。女君は国のとなりまでも聞え給ふ美人なるが、

このように、人目を忍んで隠れこもる未亡人として現れてくる。この部分に関しては「美人」という表記や話の内容から、「忠臣蔵」の「顔世御前」、「塩治判官」が下敷きとしてあつたと指摘されてきた。もちろんこれは妥当な説であると考えられるが、なぜこの「美人」に隠れこもるイメージがつかまとうのかという点に関しては、「忠臣蔵」が下敷きであつたというだけでは理解しがたい。やはり「印南」に付与されている隠妻の伝承がここにも重ねられていたことが分かる。

〈荒井の里〉

そしてこの「印南郡荒井の里」において、正太郎が凄惨な死を遂げ、この夫婦の結婚生活に凄まじい結末がつけられる。しかもこの物語が単なる怪奇な復讐譚とならないのは、この「荒井の里」での出来事とされているためと考えることがができる。

もちろん、こうした物語の悲惨な結末は、吉備津神社の御釜祓で予告されていたことではあつた。中世から近世にかけて、この神事については多くの書が言及している。「雨月物語」成立以前のものでも、「多聞院日記」や木下長嘯子の「九州みちの記」、「本朝神社考」、「神社啓蒙」、「統無名抄」、「神道名目類聚鈔」、「和漢三才図会」、「本朝怪談故事」、「諸国里人談」などがあり、そのほかにも「譚海」、「類聚名物考」、「耳袋」などに載せられている。正太郎と磯良の結婚には「只秋の虫の叢にすだくばかりの声もなし。」と凶兆が示されていた。

しかし、この「荒井の里」という地名の含みこむものも同時に、この二人の結婚の結末を導き出すものとなつていたのである。「荒井の里」を地誌的に実体化して考えてみると、磯一峰の「越路紀行」（宝永元年成立）では

八月廿九日。高砂の民家まで行く。市郷荒井など云所。川ありて船にて渡りぬ。人争ひ乗りて翻る、ばかり也。危き事限りなし。

〔続帝国文庫 続紀行文集〕博文刊 明三三 八）
とあり、渡し場のある繁華な土地であることがわかる。また秦石田の「播磨名所巡覧図会」（文化元年刊）の「荒井」の項には、

高砂の西にあり。昔塩屋多し。もつとも上品なりしとぞ。今はなし。この里に加古川の分流ありて、わたしあり。

〔日本名所風俗図会〕一三 角川書店 昭五五 八）
というように、高砂の近くの海辺の地とされている。この荒井は高

砂とともに河口のデルタ上に位置して播磨灘に面していたとされている（『日本名所風俗図会』一三 前出）。高田衛氏は、こうした地誌的実状と「荒井の里」とがかけ離れていると指摘する。すなわち、物語の中で「荒井の里」とは草深い荒野、僻村といった印象を受けてしまうものになっているにもかかわらず、この「荒井の里」の実状は高砂に近い海辺地帯なのであったとする（前出論文）。確かにこの物語における「荒井の里」は海辺の印象からほど遠いものであるし、高砂という繁華な地のすぐそばとは考えられないほどの僻地のイメージがある。これは、ひとつには「印南」「印南野」という地名がもたらす、広大な野という印象によるものと思われる。前伊予守貞世朝臣の「道ゆきふり」にみえる、

いなみ野といふははるかにをしはれて四方にくまなくあさぢかれわたりて、やうく下もえいづるもいとけうあり。

〔群書類従〕一八輯 昭三四 一二二

といった荒廃したイメージは、『万葉集』巻六の九四〇番歌、
印南野の浅茅押しなべさ寝る夜の日長くあれば家し惚はゆ
（『日本古典文学大系 万葉集二』岩波書店 昭三四 九）

にあるように、「印南野」が浅茅の繁る広大な野であったことによる。

しかもそうした「印南野」の広大な荒涼としたイメージと重ね合わせるように「荒井」という表記を持つ。従って「荒井の里」という地名を示す言葉は、そのまま字義通り、荒れ果てた印象をもたらすものになってしまう。「荒井の里」が地誌的実状から遊離してし

まった最大の原因がこれなのである。隠れこもる荒廃した広野の印象を持ち続けてきた「印南野」に、高砂という繁華な地のすぐそばにある、海辺の地「荒井の里」が結び付けられことによって、実体としての土地が後退していった。

また、高田衛氏が指摘したように（前出論文）、この「荒井の里」は夫婦和合と長寿を象徴する高砂の浦に他ならないのに、その高砂においてこの夫婦が世にも稀な凄惨な破滅を遂げるといふ「衝撃的物語の深層」がある。この「荒井の里」が、謡曲「高砂」を想起させる場所であったことが問題となる。夫婦の仲睦まじさと長寿といったものを、イメージとして内包する高砂の浦である「荒井の里」で、正太郎とその愛人袖との新しい出発が始まるはずであった。しかし、袖がその命を失った時、正太郎と磯良の和合がなされる。すなわち、正太郎と磯良の死と破滅は、彼らにしてみれば、真の再会であり和合だった。このように、「印南郡荒井の里」「印南野」といった地名を示す言葉が、物語の深層に関わり、夫婦の結婚の奇妙な解決をもたらしている。

〈刀田の里〉

「荒野の三味堂」で磯良の死霊に脅かされた正太郎は、袖のいとこの彦六の勧めで、「刀田の里」の「たふとき陰陽師」を訪ね、その死期が迫っていることを知る。この「陰陽師」の登場については、従来から播磨の国と陰陽師との深い関わりによるものであることが指摘されてきた。鶴月洋氏が「雨月物語評釈」の中で説明するように、例えば『今昔物語集』巻二四第一九「播磨国陰陽師智徳法師語」

などに播磨の国と陰陽師との関わりが見られる。ここで智徳という陰陽師の力の強大さが語られ、末尾の部分では「かかる者、播磨の国にありけりとなむ、語り伝へたる」とや。「今昔物語集」旺文社昭五九 三」とされている。従って、本作品(「吉備津の釜」)の末尾で「陰陽師が占のいちじるき」ことが「いとたふとかりけりとかたり伝へ」られるのである。そして正太郎が播磨の国へ足を踏み入れる設定が、陰陽師のところへと導くものとなる。

そしてその「刀田の里」が救済の霊場とされているのである。この地名「トダ」とはよくある地名で、「戸田」「富田」とも書かれ、「播磨の国の刀田」も「大日本地名辞書」(前出)には、「戸田」として載せられている。「トダ」の意味ははっきりしないが、尾張国や相模国の「戸田」がかつては「富田」と書いたとあり、尾張の「戸田」は米の名産地であることから、農耕に関する地であったとわかる。「富(富)」や「戸」を字義通りに考えると、豊かな田、あるいは田の入り口といった場所を示した言葉であったかもしれない。こうした「トダ」に「刀田」という字が当てられたのは、この地にある鶴林寺の山号であるからというのではなく、その「刀」という文字に注目しなければ理解できない。

刀田山鶴林寺は「荒井の里」から東に約四キロほどの地点にあり、この点について諸注釈書は一致を見ている。刀田山鶴林寺について「播磨国名所巡覧図会」では次のように記している。

草創は人皇三十一代敏達帝十二年、聖徳太子十二歳の御時、仏法興隆の地を天文博士に卜はせたまふに(略)播州塵子郡、山

海の中に広大の平原あり。これ万代不朽、仏法繁栄の地なりといふ。(略)右の方の厨子には太子の二歳、同十六歳、四十二歳、三影合体の尊像あり。すなはち、太子の御頂の髪を植ゑさせたまふ。ゆゑに、世に植髪(うゑかみ)の太子と称し奉る。

(前出)

これによると、刀田山鶴林寺は聖徳太子建立の寺であり、太子の御髪を植えた尊像があると世に知られていたことがわかる。

このような聖徳太子の霊験あらたかな地を正太郎は訪れ、しかも強大な力を持つとされてきた陰陽師に救いを求める。陰陽師のくれた朱符の威力で、夜ごとやってくる磯良の霊は正太郎に近づくことができない。少なくともできないかのようにふるまっている。しかしそのような太子の霊力や陰陽師の力もむなしく、正太郎は磯良に捕えられてしまう。「あなや」と叫ぶ声に壁隣りの家から彦六が外に出てみると、

月あかりに見れば、軒の端にもものあり。ともし火を擗けて照し見るに、男の髪(もんどり)の髻ばかりかかちて、外には露ばかりのものもなし。浅ましくもおそろしさは筆につくすべうもあらずなん。夜も明けてちかき野山(みやま)を探しもとむれども、つひに其跡さへなくてやみぬ。

ただ正太郎のものと思われる「髻」だけが軒の端にかかっていたとある。例えば無残な死体だけが残っていたというのではなく、何も残らないが「髻」だけが奇妙な場所にあったという不気味さをもって物語は終わる。磯良が正太郎をとるところすクライマックスの場面

については、その怪異性という面から多くの言及がなされてきた。そしてこの部分は「新御伽婢子」巻一の二「化女髻」や「日本霊異記」中卷三三「女人悪鬼見点攸食噉縁」、「今昔物語集」卷二〇第三七や同卷二七第七、「伊勢物語」第六段など多くのものが典拠作品として指摘されてきた。しかしこうした典拠作品に本質があるのではなく、神社に髪を奉納して、その持つ呪力によって祈願するという習俗上の道具立てとみなすのが、青木正次氏の意見である（『雨月物語』上³⁶）。実際に、こうした習俗からくる恐怖心がこの場面での中心となっているとも考えられる。しかし、同時にこの「髻」だけを残して死なねばならなかった正太郎が、救いを求めた「刀田の里」という、聖徳太子ゆかりの地もこの場面に関わっていたと考えられる。

この「トダ」という地に「戸」や「富」ではなく「刀」が当てられた理由は不明である。しかし、このような字が当てられたとき、その説明としての起源説話が作り出される。貝原益軒の『有馬山温泉記 追加』（正徳三年頃成立）の「刀田山」の項には、

尾上より八町あり。海道に近し。本尊は聖徳太子能伽藍。敏達天皇十二年に、百済国の日羅を殺せし刀を、田の中に入れて隠しける所なるゆゑ、刀田山と云とぞ。日羅の事は日本紀廿卷に委に見えたり、

（『益軒全集』卷七 益軒全集刊行部 明四四 八）

というように、日羅の伝承としてこの地名の起源が説明されている。日羅に関しては『日本書紀』敏達天皇の条に見える。それによ

ると、日羅は身から光を発しているため暗殺者もなかなか近づけなかったという。この発光の説話の起源は不明であるが、後に日羅が弥勒の化身とされるようになった事との関係があるようである³⁷。しかしこの発光説話は日羅と聖徳太子との関係においても認められ、『三宝絵詞』『日本往生極楽記』『元亨釈書』『今昔物語集』『古今著聞集』などに示される。百済より来朝した日羅が聖徳太子を見て拝み奉り、光を放ったところ、それに呼応して太子も眉間から光を放ったという説話である。このように仏教関係の説話において、聖徳太子と日羅は密接に結び付けられている。益軒の記す「刀田山」の地名起源説話も、この二人の結びつきから生み出されていたのだろう。古くから聖徳太子伝承の地として「トダ」があり、「刀」という文字を媒介にして、太子とゆかりがあり、しかも後に暗殺されてしまった日羅の伝承がこの地に関わるようになったのだろう。

正太郎をとり殺しに來た磯良の姿を「赤き光」としているのも、蛇性としての特性がその基底にあったというだけではなく、この「刀田」にまつわる聖徳太子と日羅の発光の伝承によるものもあつたかもしれない。しかしこの「刀田の里」が聖徳太子伝承の根強い地であるということをおぼろげに忘れるべきではない。聖徳太子伝承がなければ日羅の話も付会されることはなかっただろう。聖徳太子伝承の地としての「刀田」を考えると、ここは植髪の子像で有名などころであつた。太子の頂の髪を植えた尊像は、その分身として捉えられ、それゆゑに非常に靈驗あらたかな尊いものとされたはずである。こうした神聖な髪が、生々しく肉体化されたとき、それは恐怖の対象

へとすり替わる。さきにあげた青木正次氏の指摘である、習俗としての恐怖も実は、こうした髪的肉体性への恐れに他ならない。髪が人間の身体から離れた時、それはただの物質になるのではなく、その人間の分身であり、新たな肉体をそれ自身が形成するものとなってしまう。そのことが髪への畏怖心、恐怖心を生み出していったのだらう。従って、正太郎の残された「髻」は生々しい肉体としてその死体以上に恐怖心を与えるものとなる。このような、本人の分身であり、生々しく肉体化された「髻」へと正太郎が化してしまう物語の展開は、まさに髪とかかわりのある「刀田の里」という場所を名指す言葉が生み出したものと考えることができる。

三

古代の神々の行為やそれにまつわる神々の痕跡とそのイメージ。また神々が宿るものとしての地名やそこに内包するもの。こうした言葉の基底にある古代的神性といったものが物語に関わるさまを見できた。神話性のみじんも無くむしろ現実的な正太郎に、神話性の体現ともいえるべき磯良が出会わされると、物語は古代的神性に彩られ、正太郎はそれからめとられていく。

しかも物語末尾の一文、

されば陰陽師が占のいちじるき、御釜の凶祥もはたがはざりけるぞ、いとまたふとかりけるとかたり伝へけり。

は吉備津の神の神託や陰陽師の見立ての正確さを述べるものとなっ

ているが、人間が切実に求める救済を神は与えてくれないということも示している。網の目のように張り巡らされた言葉の底に潜むものによって、物語は作り上げられ、古代的神性の裏に隠されたもう一つの側面―生々しさを伴った荒ぶる神性―をあぶりだすものとなっているのである。

注

- (1) 岡山文庫52 日本文教出版 昭四八・三
- (2) 角川書店 昭四四・三
- (3) 有精堂 昭五〇・九
- (4) 浅野三平「吉備津の釜」考」『女子大國文』昭五〇・一二
- (5) 『日本古典文学大系 古事記祝詞』岩波書店 昭三三・六
- (6) 南方熊楠は「十二支考―蛇に関する民俗と伝説」『南方熊楠全集』1 平凡社 昭六三 四)において、もとは野の神の名だったものが零落したものかとし、ノヅチとは野の主の意とする。
- (7) 折口信夫「河童の話」『折口信夫全集』巻三 中央公論社 昭五九・七)及び「春立つ鬼」(同書巻一五 中央公論社 昭五八・一)による。
- (8) 法政大学出版局 昭五四・二
- (9) 『吉備群書集成』第一輯(吉備群書集成刊行会 大一〇・五)に載っている土肥経平の地誌「寸籬之塵」では、この笠臣の話に続けて、笠蓑を地名とするのは、ササノヲノ命の蓑笠より起こったものだとし、笠を折口的な発想からとらえている。
- (10) 学生社 昭五二
- (11) 『近世文芸』平成元・六
- (12) 「歌謡を中心とした王朝の文学」第三の一、「上世日本文学」第四の三(折口信夫全集)巻二二 中央公論社 昭五一・四)など。

- (13) 筑摩書房 昭三七・九
- (14) 高橋庄次氏は同論文で、全国各地の御崎や浦に磯良を祀る祠があつたと考え、吉備津神社に鎮座する丑寅御崎という神の分霊として、村々に御崎神社が多数あるとしている。そしてこれと磯良との關係を考えている。
- (15) 富山房 明四〇・一〇
- (16) 吉田東伍『大日本地名辞書』(富山房 明四〇・一〇)
- (17) 藤井駿『吉備津神社』(日本文教出版 昭四八・三)
- (18) 有精堂 昭六三・五
- (19) 校倉書房 昭五四・一二
- (20) 16と同じ。
- (21) 中央公論社 昭五一・四
- (22) 昭四六・七
- (23) 『日本古典文学大系 風土記』(岩波書店 昭三三・四)
- (24) 鶴月洋『雨月物語評釈』(角川書店 昭四四 三)など。
- (25) 16と同じ。
- (26) 『雨月物語 上』(講談社 昭五六・六)。これと同じような視点に立っているのが矢野公和氏の「『うらみ・ます』—『吉備津の釜』—私論」(共立女子短期大学紀要 昭五九・二)で、女が夫の愛人の死を祈願する呪詛の言葉と共に、髪を奉納する習俗から、袖に対する呪殺祈願の凄まじさをこの場面が示唆していると指摘する。
- (27) 『日本古典文学大系 日本書紀下』(岩波書店 昭四〇・七)の頭注。

本文の引用は、ちくま学芸文庫『雨月物語』(高田衛 稲田篤信 校注 筑摩書房 平一一・五)による。